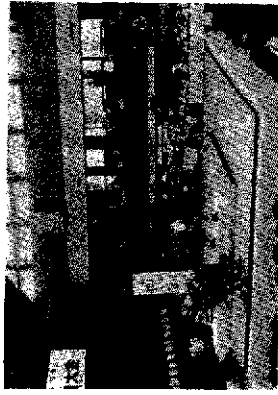


重量挙げ部

確か四十一年三月だつたと思ふが、中央の協会より東京五輪三位の大内選手を本校と出雲農高に招いて、普及のための講習会が開催されたのが本県重量挙げ協会初の行事であつた。私達受講者一同一流選手の試技をじかに見て大変感動したものだつた。そして二年後の四十三年には本校重量挙げ部の発足開始。これより今日の輝かしい活躍を納めている我部の歴史が始まる。当時



の部は現在使用している正式のバーベルでなくトレーニング用を使用、毎日吉田先生(現浜田ナマコン重役)指導のもとに練習をしていた。県に重量挙げが入つてまもなくのことで練習方法も解らず、レベルもそれなりに低く、とにかく暗中模索であつたらしい。この六年間で特に光る成績は、四十八年県総体で常陸出雲農高を破り初めて全国大会に出場したということだ。正式バーベル無し、というハンデの中での初優勝だけに高く評価できる。立派な伝統を作つたものだ。そして本年の同大会連続優勝、全国大会出場へと続く。本県重量挙げのパイオニア的役割は十分に果している。現在部員数十五名、毎日二時間の練習を行っている。重量挙げというスポーツは他のスポーツに比べ開始年齢が遅く、ほとんど高校入学と同時にである。スタートが同じで高校三年間という範囲の勝負をすれば、当然その間に充実した練習をしたものが勝る。如何にやるかこれが問題だ。(写真は四十九年全国総体シャーク競技。藤井君)

レスリング同好会

アマチュアレスリングは本県ではなごみの薄いスポーツであり、一般にはプロレスと混同されるむきも少なくない。が、オリンピック等で大活躍をした競技であることは記憶に新しい。このような現状の中で本年度レスリング同好会が本校に発足した。会員十五名、毎日練習に励んでいる。無から有を生ずる困難を味わいながら、徐々にレスリングを理解すべく鍛錬している。



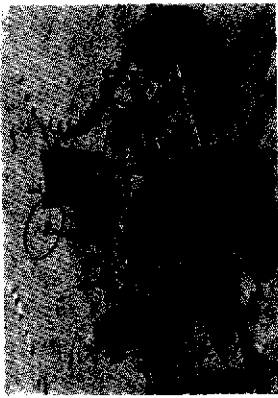
レスリングの特色は、四八キログラム以下から一〇〇キログラム以上まで階級が分かれており、ルールも簡単、誰でも気軽に楽しめるスポーツであること、即ち小男から大男までできるということである。

レスリング同好会にとっての一番の悩みは、生徒会への予算要求権がなく、遠征は全く自己負担となっていること、レスリング勉強のための金のないことである。しかし、来年度はおそらく部として承認されこの悩みは解消されるものと思つている。

本県で現在レスリング部(同好会)のある高校はわずか五校にすぎない。その五校中、松江工高が抜群に強い。本校の当面の目標は、この松江工高に追いつき打倒することにあるが、それは並大抵のことではない。しかし不断の精進により伝統を築き、この公約を果たす覚悟で全員で頑張つて行きたい。島根国体への参加を心に秘め、「克己」を合言葉にして、(ブリッジ練習に汗を流す会員、本校レスリング場にて)

自動車部

自動車部は、同好会に端を発し、昭和三十八年に生徒のクラブに導入され、谷本(三八年)河野(三五年)島田(四十年)久保田(四二年)山本(四佐々木)(四二年)岡本(四三年)安田(四四年)新家(四五年)沖野(四六年)岩瀬(四七年)寺田(四八年)藤川(四九年)と機械科三年の部長を主軸にして運営され、活動場所が機械科に居候していた事に利を得て



この間運転練習ばかりでなく、ゴーカート、バギー等の製作改良等が、行なわれて来た。これによつて整備技術習得の気運も高まり、エンカ服姿もみられる様になり、エンジンオーバーホールも毎年行なわれる様になつて内容も充実、高度化して来たようだ。しかし今後は主目的であつた運転免許の取得が部活動のみでは困難になつた事、その他間接的に企業の不況、物価高騰による車、石油の値上げ、公害対策問題等が、クローズアップされ、自動車への興味減退、敬遠がクラブ活動にも大きく影響しそふに思えるので運営も少劣を要するものになるであらう。

だが、これに屈することなく、企業経営の要務経験として受けとめさせスローアウェイ時代の文化の遺物を利用して有意義さを認識させて、一層発展させたいものである。(写真は自作のゴーカート)

応援部

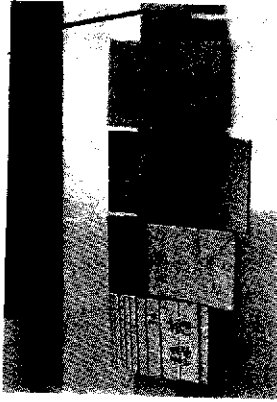
本校応援部の確立期は昭和四十五年三月、創立以来の快挙であつた好投手三沢 淳(現中日)を擁して甲子園選抜野球に出場した時で、將に意義深く忘れ得ない年といえる。そもそも応援部活動は野球部のそれと共にあると言つて過言でなく、野球部盛衰が応援部の歴史となっている。昭和四十年野球部が中国大会に出場し応援部の設立の声がたかまり当時の団長機械科三森和夫君が中心となり、県下で有名な大山高校応援部の指導を受け江上応援



部の体制を整備したのがきっかけで、以後昭和四十二年度生徒会の応援部として予算五千円で誕生した。その後前述した如く昭和四十五年野球部が春夏連続甲子園に出場という年に関西学院大学応援団の指導を厳業卓中の二月、日体育館で受けた。この時の応援部部長が電気科花坂吾郎君で彼は誠実と熱心に溢れた人物で本校応援部の全盛時代を作り、今日の基礎を確立したといえる。あの甲子園で雷鳴と激しい雨の中をいわず不動の団旗を中心に精一杯の応援は今なお鮮明に且強烈な印象として声援者の瞳に焼きついている。質実剛健、不撓不屈の男らしい応援は先ず県下で有数の域に達し、本校の応援部の伝統となっている。現在電気科藤原博文君を中心に女子部員二名を含む三十一名ががっちり受け継ぎ懸命の努力をしている。

文 芸 部

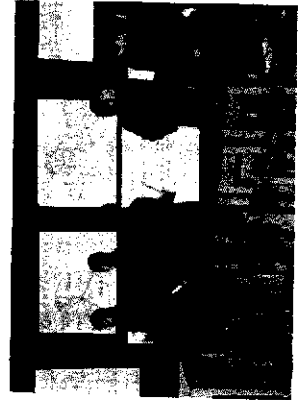
ある日の放課後、図書館の片隅で少人数のグループが何やら打ち合わせをしていた。その中に私も首を突込んでみたら、文芸誌「緑蔭」の編集を如何にしたらの話し合いであった。彼等は一生懸命知恵をしぼっているが、なかなか難しそうに顔つきをしている。かなりの時間を食ったあげく、それでも一応の計画を立てて、ほっとした笑みを一回が得る。「緑蔭」という文芸



誌の発行は文芸部にとって一番中心となる最も厄介な活動である。それがいつ頃から、どのような形で続けられているものか私もよく知らない。手もとにあるものが、三十四号であるから、一年に何号も発行したことがあったとしても、かなり以前から存在しているものであろうし、また文芸部も相当な歴史をもつものであろう。ともあれ、生徒達はその伝統を受け継いで、「緑蔭」の編集に精を出すのである。文芸部という呼称はある種の抵抗感を抱くのか、いたって人員の少ない部である。入部している生徒達は自分の心情をときどき、文に表わして充実感を味わったり、他人の文を鑑賞したりしている。できればどうのこうのというのは、さほど問題としない。ただそれだけでいいのである。人間誰にも内在している心情を歌いあげて、それに満足して、それによって心が広くなっていることに気がつく。

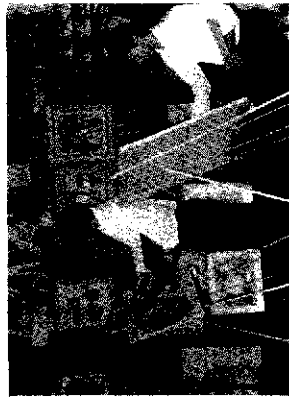
新 聞 部

昭和二十七年に平野保男先生（現在浜田商高）を顧問に、同好の生徒数名で創立され、同年に「江工タイムズ」第一号が創刊された。以来二十三年間原則として年一回発行し、色々と壁にぶつかりながらも今日までに五十三号を発行してきている。記事の内容は、ある一時期には学校内外に広く取材し、社会情勢の変化を敏感に受けとめて、その時の重大な社会問題、学校教育の問題点や生徒会の在り方を論じてきたが、近年は平穩な高校生活を反映してか、殆んど学校内の出来事を記事にするようになってきている。対外的活動としては、昭和二十九年から島根県高文連新聞部門に加盟しており、昭和四十三年度と四十六年度の二回にわたって新聞部門の担当校の任に就き、その職責を果たし、また部門内での新聞コンクールにも三度入賞することができた。担当校であった四十三年度には、高文連主催のオリンピアードに新聞部門の代表校として、「沖縄の現状」をテーマに参加し、好評を博した。以上のように、新聞部は地味な存在ながらも、部活動を運んで、まとめる力、物を見る眼を養うことができるし、何よりもインクの匂いがする刷り上がったばかりの「江工タイムズ」を手にした時の喜びは何物にもかまがたい。



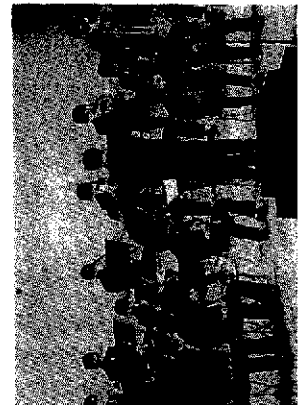
美 術 部

本校が高文連に加入する前年だったと思う。長岡先生が絵の好きな生徒をつれて、オブザーバーとして高文連の写生コンクールに参加したのが、美術部の起りと考えてよいだろう。現在の購買部の部屋が美術教室として作られたものだ。これが出来たのが昭和二十七年だから、美術部の活動も、その前後のことだろう。美術部は強制的な面はなく、好きだからやるという部だ。好きな者が集まり、絵を描き、彫塑を作り、時には陶器も作った。二〇号、二〇号の油絵を描いた。時には四〇号の大作をものして、中央の東本館に入選した生徒もいる。昔は女子のいない学校だったので、彫塑ではモデルに苦労した。男同志で作ったり、鶏や兎も作った。女のモデルに出会うとはりきって作った。文化祭には大きな抽象彫刻も作って並べた。卒業後、今でも制作を続けている人達に出会うと、心躍る思いがする。年間の主な活動は、春の高文連の写生コンクール、秋の高等学校美術展の出展。部員の数は少ないけれど、入選率は高い。また夏休中五日間の洋画講習会の参加はいい勉強になる。また部独自の写生会は格別に楽しい。三瓶一泊の写生会などいい思い出だ。



音 楽 部

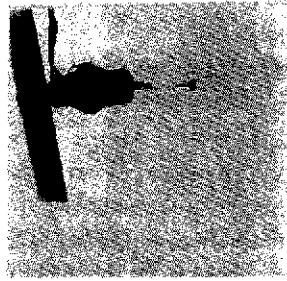
音楽部は昭和二十一年、戦後の物資不足のさなか創設され、部員の数も十一名という少人数であった。二十七年には部員数も二十名となり、この年に田中繁二郎先生（講師）の指揮で高文連音楽会に初参加、また市民音楽会にも参加し、市民の皆さんの喝采をあげた。田中先生には二十九年まで御指導いただいたが、この年病魔に倒れられた。四十年には川本吹奏楽部育ての親である塩田卓湖先生を講師としてお迎え、その情熱にあふれたエーキアのある御指導により、部員の腕もめきめき上達し、この年、第六回吹奏楽コンクール島根県大会に部員三十名で上野敏子先生の指揮のもと初出場し見事第四位に入賞、江工音楽部の名を県下にとどろかせた。以後四十二年までコンクールに連続出場し銀賞を獲得している。一方市内の病院・施設等の慰問、市音楽祭等にも活躍した。四十五年には野球部が待望の甲子園出場を果たし、応援部と共に力を入った応援を、あのマンモススタンドに披露し、グラウンドの選手を盛り立てた。最近では女子部員も加わり、常時三十名を保ち中編成ながら安定した楽団に成長し、学校行事に校外活動に充実した演奏をしている。「一般教養に富み豊かな人間性を持つ」と部をのモットーに毎日楽しい中にも部員相互の和を深めながら練習を続けている。



(写真は四十八年度高文連音楽会「大田西」にて)

写真部

写真部は、創設以来本年度で二十三年もの長い歴史をもっている。独自の部屋はなく、創設当時から化学の狭い暗室で引伸機を使ってコンクール入選をめざしてけん命に努力している。今年の高文連春季コンクールにおいては、特選二点、入選二点、佳作十四点の成績であった。また、十二月に開催される第二回高校写真展にも二点出品することが決定した。



主要行事は、春季、秋季に行なわれる高文連主催の美術コンクール写真の部に部員の日頃の傑作を出品している。その他校内においては身分証明書写真、クラス写真や運動会、文化祭などの学校行事の記念スナップ写真を撮っている。かつて全員で協力した成果を文化祭においてスリシリーズとして展示し好評を博した。

また、長い間に培われたものとしては、先ず、家族的で上級生下級生という上下の隔たりがない。次は、自主的自発的に研鑽する。上級生は下級生の技術指導し、下級生はこれを受け継ぎ自発的に研究してゆく雰囲気がある。

なお、作品はスナップ写真が多く表現も語り。今後は、ただ「写す」いわゆる複写でなく、自分はこの作品によって何を訴えようとするのか、それを作品の上にかに強調するかを課題として全員で努力している。

(写真は第二回高校写真展出品作品、中川松善君の「電球」)

園芸部

文字通り白砂と青松に囲まれ、絶佳の環境にめぐまれた我等が学園に更に美しい彩りを加えて、情懷豊かな工業人を養成しようと、二八年に園芸部が誕生しました。以来十年余、校舎の増築などめまぐるしい校内環境の変化に追われて、ここといった特定の活動の場もなく今日に及んでいますが、同好の生徒、先生相集い校舎周辺の空地をえらび花壇を設けてささやかながら四季折々の彩りを得るよう心掛けて参りました。校舎の増築築も一段落して周囲の環境整備もほぼ完了した現在、活動の場である全校の花壇計画を再検討し、又温室を設置してここで栽培した四季の草花を各H Rに配して花による教室内の美化計画、更に盆栽の楽しさを味わうべく盆栽教室の開設など、多くの夢を描きながら校舎内外の身近かな環境の美化に地味な活動を続けています。



英語部

英語部の構成は、小林先生、宮脇先生の高先生と、二年生七名、一年生二名で構成されています。

現在の活動は、タイプライターの練習、毎日ウィークリーの英文会話の部分を、全員で和訳、和文を英訳、クロスワードパズル、英語検定を受けたり、時々、英語会話や、英語の歌を聞きます。昨年までは、外国の少年少女との海外文通をしていた人もありましたが、今年、今の所、みんなで相談して決めています。

部員が、二年なので長期の計画を立てて、英語部をいかに発展させるかを重視して、二学期中には、部員の大部分を、米、英、中華民国、独、印、マレーシアなどの、発展途上国の少年少女と、便りを交換して習慣や宗教についての文通をしたいと思っています。そして、その間にも、リーダーの練習、英文のカルタ遊び、たまにはスナッチでの英語劇などもやってみようと思います。

そして、活動によって親睦を深め、かつ、英語という外国のこぼけに興味を持ち、そしてそれを自分のものにならうとするのが、英語部の第一の目的です。

(この写真は、放課後の英語部の活動状態です)



計算尺部

日本商工会議所主催の全国計算尺競技大会と、全国工業高等学校校長協会の計算尺技能検定合格を目指して日々たゆまぬ努力を続けている。

全国計算尺競技島根県大会へは毎年参加しているが、全国大会への出場チャンスには恵まれていない。(二位入賞は六回もあるのだが)

技能検定の方は日商一級に棋野一名、校長協会一級に谷外六名、二級に三十七名も合格して練習の成果を十分に発揮している。(現在の読取算風量)

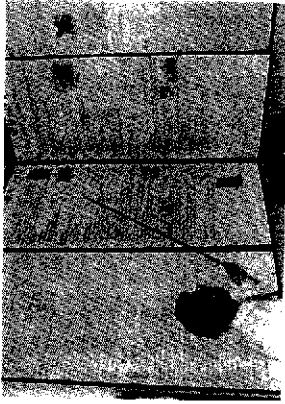


年度	部長	部員数	一級合格者
三八	新井	四五	なし
三九	笠原 惣外	谷	三〇
四〇	数学科教員	谷	二六
四一	全員	村尾	一五
四二		前場	二三
四三	島田 勝部	佐々木	二七
四四	島田 勝部	新治	二三
四五	島田 勝部	井上	一六
四六	島田 勝部	上野	一八
四七	笠原 大塚	宮下	二二
四八	笠原 大塚	松浦	一五

物理部

物理部は、昭和二十九年四月に発足した。当時は、理科実験器具の片隅にささやかな実験台をととのえ、顧問の先生、生徒諸君共々真剣に研究に取り組んだ。そしてその成果を発表するに至った。昭和四十二年、島根県高等学校文化連盟自然科学部研究発表会に「運動の研究」を発表して優秀賞となる。日本学生科学賞島根県科学賞に「バネに関する研究」を発表した。昭和四十二年、島根県高等学校文化連盟自然科学部研究発表会に、「共鳴振子の研究」を発表して優秀賞を得た。日本学生科学賞島根県賞に「水波の研究」を発表し入賞した。昭和四十二年、日本学生科学賞島根県賞に「振動のない波」を発表して入賞した。この二、四年間の物理部の研究成果は広く校外にも発表し、めざましい進歩が見られた時代であった。その後引き続き「運動の研究」「ふり子の研究」「泡の研究」とそれぞれの研究部門に別れて五、六人づつグループになって、一年間、あるいは二年連続で研究の結果をまとめた。その中で運動の研究「光のちらつきと縞模様の研究」を科学クラブ友の会に発表した。研究も活発になるにつれ部室の音が高まり、物理室の一部を改造して、物理部室を設けて頂いた。最近では研究成果を校外に発表していないが校内の文化祭に科学クラブ物理部の研究を展示発表している。

(写真は高文連研究発表会の参加作品)



化学部

化学部は、現在三年生9人二年生4人、一年生10人で活動しています。昨年まで、江川の水質検査を三次まで逆のぼって数年間続けてきましたが、余り目立つた変化もなく、汚染の程度もはつきりしなかったため、今年はとりやめています。目下雑誌や資料をもとにして、いろいろ適当な実験をさがしている現状です。その一つにこのごろさがれている食品添加物の分析があります。これは防腐剤と着色剤に分かれ、前者の方が有害なものが多くできればやりたいのですが現状では設備的に無理です。その着色料の方は、比較的簡単にペーカロやカラム、薄層で可能なので、日常よく口にする清涼飲料や菓子の加工品について、その物質名を調べたり、できたら定量をやりたいと思っています。第二に簡単な有機化合物の合成を考えています。モノアミン、尿酸樹脂、アルキド樹脂、人絹、PVA、アルカロイドの抽出と性質などをやる予定にしています。現状では機器をつかわないで、今ある設備だけでやらねばならないので、どうしてもごく簡単なものしかできないのが残念です。試薬不足で目下出遅に行っていますが、早く整えて早急にとりかかり、そして何年か続けて研究できる問題を見つけてやりたいものだと考えています。(写真は化学教室で食品の着色料をペーカロで調べているものです)



放送部

放送部は校内における融和的、文化的な雰囲気を作成することを目的として設置されたものである。伝達に終っていた放送が、昭和四十七年「放送研究同好会」として発足し、昨四十八年には放送部として認められ、若々しい声が校内に流れている。

設置にあたっては現在川本高校に転勤された宮村先生を中心に、福原、中尾名先生と生徒の熱意によって結成したものである。部長橋本君以下部員十七名が主となって活躍している。

内容的には日常の放送、運動会文化祭など学校行事における放送、研修の二部門に分けることができる。朝の七時五十五分より音楽と共に流される「今日の歴史」に学校生活が始まる。昼食時は十分間のランチタイム。この間に生徒会活動を中心とするクラブ、ミュージック、文芸、学校行事や時々の話題を扱うフリーコーナー、生徒の希望曲を中心とするリクエストコーナーなどである。研修部門では情報化社会に生きる高校生にとって、校内放送の健全な育成と放送教育の推進をはかるため、一高生校生のための放送講座」に参加、六日に行われた高校放送コンテストに県大会出場権を得た。

県下各校の水準に比してまだく、研究の必要を痛感するが、校内活動が番組制作、原稿、練習、放送など地味であるだけに研修を深めて伝統ある放送部に育成し、高度な文化的雰囲気の一環となれば幸いである。



電子部

電子部という名称に変わったのは二年前。それまでは、ラジオ部と呼んでいたが「アマチュア無線」に片寄っていたので、イメージを変えるためと電子工学を幅広くやろうという趣旨からだった。従って、テレビ、ステレオ、その他電子工学関係の主なことはなんでも研究しようということだが、予算的な関係から年間を通してなんでもというわけにはいかない。結局、常時やっているのはアマチュア無線ということになる。

アマチュア無線のことは、一昨年の江川水害時、松江町や川本町が孤立した町の様子を県などへ報告して活躍した如く、簡単な知識と技術で発信できるのが特徴である。本校の送信機で例をとると、中国地方であれば常時電波が飛び、空中の状態がよいときには北海道の方までも電波が届いて発信できる。送信機は八重洲製のSSB(単側波帯)方式で、出力は法規上一〇Wに押えられている。

クラブ員の現況を紹介すると、部員総数三九名、免許所持者十名、科別部員の内訳はA科一名、M科三名、C科四名で残りがE科ということになる。こういうクラブ活動的なものは、学生時代でないと思えないし、設備に恵まれている学校だから、部員一同張り切って発信にそして研究に取り組んでおるのが現状である。



J R C 部

JRC(青少年赤十字)の仕事として大きく取り上げられるものに、奉仕活動があります。その一例として江津駅の清掃、赤い羽根募金運動への協力などがあげられます。また学校内においては防火用水の入れ替えもその一つです。今までに述べたのは肉体的な奉仕ですが、それに劣らないだけの精神的奉仕、つまりボランティア精神を主とした活動もあります。



これは他人の苦しみや悲しみを、他人ごとならず思つて立ち上がる心を持って活動するもので、たとえば折衝を思まれない人達に送ったり、色々な施設を訪問したりすることなどがあげられます。幸いに我校ではその結果も比較的良好、何かにつけて色々と役立つといえます。

JRCが活動する場合、部員の活動が活発なことはもちろんですが、それよりも皆さんの協力ということが大切です。部員が盛り立てて、それに皆さんの協力が加味されてはじめて活動として成り立つのです。

また去年からJRCでは、石見地区全体を一つのブロックとして、互いに他校との関連を密接にし、そこから広範な活動へ押し進める運動を行なっています。しかし他校と密接にすると言っても、そこには難しい点があって、この結果が出るのはまだく先ですが、互いに協力すれば活動の範囲も広がり、より発展するようになるでしょう。

生徒会

本校生徒会活動に於ける伝統的なものといえば、よくいって穏便、悪くいえば無関心ということになる。他校に於ては過激な学生運動が起つたような時にも本校ではそのような気配もなく常に平穩無事に今日まで続いていることである。

その中であつて、部活動に於ては多くの運動部が輝かしい成果をあげてきている。良い伝統のもとに現在も団体まで進出して活躍している部がかなりある。これら部活動の支えともいへべき予算の推移を考えてみると、諸物価の高騰に伴い、生徒の納める会費も47年度より4割近い値上げになつたが、昨今の狂乱物価で来年度は再び値上げが問題になりそうである。

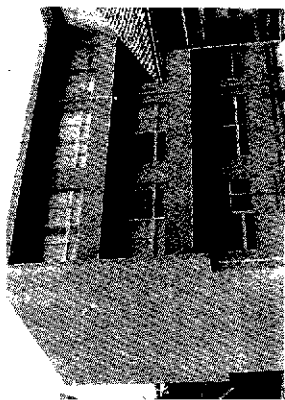
次に例年9月に催される本校運動会は他校の簡素化の傾向に反して、その伝統をいさかかも守りすぎることなく寧ろエスカレートの様相を採っている。市民もその開催を大いに期待している。この運動会は派手に行われるだけに準備に要する労力や出費も多く、時代の傾向に合っていない。また年主のみが楽しく1、2年生にとっては最も不愉快な期間であるという生徒からの訴えを聞くにつけても現在のやり方は異常で狂気の沙汰との強い批判がある。これにひきかえ、文化祭に対する一般生徒の関心の薄さはまた格別である。今年は創立40周年記念として9日旅行なれるが、運動部と比べると活動が目立たない文化部にとってその活動の成果をみせる最高の機会である。中でも各科別の展示は特色のあるものである。生徒会執行部は8年前より生徒会誌「松涛」を発刊しており、今年度末には第4号が出る予定である。生徒自身の生徒会として益々発展することを祈る。

回顧と現況

建築科

建築科は、開校以来教経間は木工建築科だけの単科設置校としての主流であるだけに、校内における矜持と責任、そして、社会的責任と貢献の重さを感ぜずにはおられません。幸いに、石見人の純真、誠実で粘り強い努力型の特性と、ましてや、先輩諸兄の築かれた業績の信頼によって、建設業界から本校の存在を高く評価されていることは、教育の場における無言の教訓であり、四十周年を契機として、新たな自覚をもって後輩の指導に専念する所存であります。

昭和四十七年三月には、鉄筋コンクリート造三階建築科実習棟が、一階は従来の木工機械を設置して木造実習室、二階は各種器具・器械を購入して計画実習室、三階は応力、ひずみ測定器を新設して構造実験室として、北校舎裏、浜辺の松奇りに完成し、更に将来計画として、他科



の実習棟と共に、同規模のものが東側へ隣接して、施工実習室、材料実験室、測量実習室として建増しされる予定です。コンピュータの出現と構造理論の研究によって、超高層ビル建設が時代の脚光を浴びている昨今ですが、本校においても、コンピュータを導入して構造設計の解析を行うことは、極めて確実性のある夢ではないかと思つています。本来、工学的理論や技術は、学問の場である学校において研究・開発されるべきものであるという認識

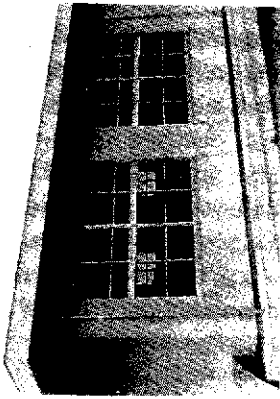
はもつておりますが、残念ながら業界の技術が先行している実情では、教育の場としての工業高校の在り方を誠実に実践して行きたいと考えております。

工業高校入学生の学力低下と多様化の波が全国的に押し寄せ、教育課程の再編成が論議されておりましたが、四十八年度入学生より新教育課程によって指導されています。従来の建築科目十三科目が、実習、設計製図、計画、構造、構造設計、施工、法規、建築史の八科目に統合、指導内容が精選され、特に、実習・実験により多くの時間数を充当するように改訂されましたけれども、建築科入学生の養育は必ずしも低下していない現実と全国工業高校工業科目標準テストで上位ランクの成績(四十七年度三年生は構造力学で第一位の成績、その他平均して例年十位内外)を収めている実績によって、従来通りの教育目標に沿って指導しております。先輩諸兄の質実剛健、迫力に満ちた気風はいさか薄れて、現代的無気力と無節操で繊細な感じのする在校生達ではありますが、一旦事ある時には、一致団結、協力して事を成し遂げる意欲と実行力は、先輩諸兄の遺された貴い無形の遺産であると喜び、学習成績もさることながら、建築技術者としてのぞましい人間形成の育成に情熱を傾ける所存であります。

動機三十有余年の温厚な岩本先生は四十二年三月退職後、更に四十七年三月まで講師として教鞭をとっていただきましたが、現在は浜田の本川建設に、三十六年九月から四十五年七月まで勤務しておられた実直な小谷先生は明治製菓、そして東京の北村建築設計へ、三十八年四月から四十四年八月までおられた新進の山根先生は浜田の田原建築設計へ、それぞれ転職されました。

機 械 科

当科はその前身である「金属工業科」として昭和十八年に創設され、昭和二十三年学制改革により工業高等専門学校「機械課程」となり今日に至り、三十年の歴史をもつまでに成長しました。実習場も木工科の片隅の僅か十坪の場所に旋盤、形削盤一台の機械工場と火床一つの鍛造工場から出発し、開校三十周年には一応各種実習場が設けられ、各種試験機、水力発電モテルプラント等の施設、設備をもつようになりました。その後昭和四十二年には本校唯一の鉄筋コンクリート造の材料試験、工業計測の実習場が完成し続いて流体実験、精密工作実習場が完成して、木造実習場ばかりの本校に一つの近代化をみる事ができました。この十年間を設備の面からふりかえってみると、本館一階の製図室には全生徒のための製図機械が備えられ、新製旋盤九台、歯車研削盤、ならい旋盤、精密



旋盤、田筒研削盤、研削盤、工具研削盤、横フライス盤、点接機、ダイカスト機、シエル鋳造機、空気ハンマー、万能試験機、空気マイクロメータ、オートコロメーター、金属顕微鏡、放電加工機、シヨア硬度計、光弾性実験装置等の他水力、空気、油圧、蒸気の種類実験装置が新しく設備されました。

その間職員では飯田昇太郎、横野、郎、渡部尚克、細木達雄、小村彪、増田勲、木田誠、大石淳一の各先生方の

転退職があり、新たに佐々木繁、美谷良秋、中島典、菅森善志、佐々木敏博の各先生方が転入されました。卒業生は十六期の二重会より、崇蘭会、三田会、山平会、不倒会、獅子組、紫雲会、百騎会、錦会、404880の会の二十五期まで八〇九名が輩立っていました。

職員は勿論生徒諸君も科の伝統である「和」を基調とした団結は固く考えそして実行する気風は例えば、夏期休暇中に実施された中学校芸術家庭科の講習会を科職員が心よく引き受け、全員が協力して八回の会を実施してきたし、又運動会においても十年の間に六回の優勝と、三回の準優勝を飾ったことはその現われと言えましょう。

新教育課程が昭和四十八年より実施されることとなり、教科の内容も実習、製図を幹とし、機械工作、機械設計、原動機、計測制御、機械材料、電気一般と科目数でみたくは減っています。これをより効果的な学習にするためには、施設、設備の改善と充実をはからなければなりません。将来は鉄骨造による各工場の拡張、管理室の設置、原動機実験室の統合等の施設の改善と、各種工作機械、実験装置、実験機器等設備の充実が必要となります。

ここで一つ考えてみなければならぬことは、科の創設当時の卒業生が現在の施設、設備と比べて皆無に等しい教育環境のなかで奮闘しながら現在では各職場で責任ある人として活躍していること想うとき、校歌にもある「質実剛健も永久に、不撓の雄叫び誰うか我」という犠牲と産業人としての自覚と考える工業人として努力があったからと思います。教育環境の整備もさることながら、和の心と不撓の精神、そして考え実行する教育がどうしても必要であります。卒業生、在校生そして職員も共に胸をはって大声で校歌をうたいたいと思っています。

(写真は四五年三月に完成した流体実験室)

工業化学科

前身である窯業科が岡村科長のもとに発足したのは、江津工業学校が新制工業になった昭和二十三年四月で、地元石州瓦、陶器業界の期待を背ったホトブであった。だがそれは四期生を世に送り出したのみで、工業化学科に改名された。郷土の窯業界の窯業科卒業生を受入れる人数が少いこと、「瓦師になるのなら教育はせんでもえ」という地域の入達の風潮から、科の入学志願者が毎年募集定数に達しないので、日本全国に広く就職先を求める為、当時の工業界の花形にならんとしていた工業化学科として、二十八年四月高井科長のもと発足した。(このとき窯業科で入学した一年生が工業化学科二年に進級し一期生となる)

窯業科の実習は、江津駅前にあった窯業補導所の工場と共用で、授業にはそこまで歩いて通っていた。やと二十八年に倒壊式角窯と試験窯



が校地内に出来たが、廃科になった後で窯業コース生や別科窯業科生の為に三十二年三月駅前の補導所の建物を移転して、校地内に窯業実習工場が完成した。現在の自動制御実習室、プラスバンド部室、合成実習室の石州瓦庫の建物がそれである。工業化学科の実習室は次のように七回に亘り、三十年から三十九年にかけて毎年のように継足して増築されてきて、工業化学棟の外壁や屋根瓦を見ればそのことが一目でわかる。

二十九年一月 分析室(現機器分析室で出窓や戸袋が多い)

三十二年三月 窯業実験室(現物化実習室で小室)天秤室

三十二年五月 定性分析室(現定量分析室)

三十五年五月 定量分析室(現定性分析室)

三十六年 職員室、準備室、合成実験室(改装)

三十七年十月 製造実習室(現プラント実習室) 分析室(現工業試験実習室) 天秤室

三十九年 自動制御実習室(旧窯業制御室を改装)

県下四工業高校のうち、木造の実習工場があるのは江津工業高校だけという事情と、近代化されつつある新設備、備品を駆使し、新しい教育をするにふさわしい鉄筋の実習場建設が、現在着々と計画立案されつつあり、現在の瓦葺の実習棟の位置に、三階建の立派な工業化学科棟が完成するのは間近のものも期待されている。

昭和二十七年四月、今まで各学年一組であったのが、第一次ベビーブームの為に高校急増対策と、人工衛星成功に刺激された工業教育振興策によつて、機械、電気科と共に二年生が二組編成になった。その為か入学志願者が定数を制する年も出てきた。二十七年に完成した実習室は、この学級増の為のものである。

又江津工業学校以来、男子のみの伝統ある学校に、四十二年四月より建築、電気科と工業化学科に女子が入学してきた。工業教育を女子にも実施して工業界の要請に答える優秀な女子の入学を期待しているのである。現在は工業化学科だけに女子六十名が在学し、女子卒業生は四十八名、主として各工場の試験研究の補助員として活躍している。

(写真は右プラント実習室その手前自動制御実習室左機器定量分析室)

電気科

二十周年がすぎ、本年の四十周年までの十年間は、電気科としては、幼年期を脱した少年期のような成長であったと思います。

この十年間に卒業生は八百名余り巣立ち、創設以来の総数は十四六名となりました。これらの方々で、電気工事士と三種電気主任技術者の資格取得者は、証明書の発行数から相当数になると思われます。後者の方は、昭和四二年十二月一日付で通産省の認定校となったため増加したのでありましたが、認定校の恩恵はそれ以前の卒業生にも適用されるということでもあります。(尚、この申請のため原科長は大変な努力をなされました)他方、この間一回も生徒会長が当選したこと、ホート部・相模部等でも電気科の生徒が他の科の生徒と一体となって活躍できるようになったことも成長の一分野といえるでしょう。



私たち教員は、夏休みを利用して県内外へと見学に出掛けます。すると、現場では大体卒業生が案内役を務めてくれますが、専門的な説明や知識が豊富で、すっかり成長しておられるのに敬服することが稀であります。卒業生の少なかった十年前までは、このように対応は全くなかったのであります。科が誕生して十五、六年かかって、漸く卒業生の数や活躍が大地に根を下したような感があります。ただし、この十年間の成長は、一電気科のみならず、

学校全体が大きく発展した時期でもありますから、その流れにのっていたのではあります。……。

実験・実習面をとりあげますと、機械工作実習室で大型旋盤二台、ボール盤二台、電気溶接機等で完備されたため、機械科の方まで実習に出掛ける必要がなくなりました。機器実習はDC電源として騒音の激しかった電動発電機を使わなくても、出力DC一五〇ボルト・電流七五アンペアがとれるシリコン整流器が購入されたので、とても便利であり、静かな環境で実習ができるようになりました。次に科として念願の発電室が昭和四三年三月二十日竣工したことは喜びに耐えません。それ以前の卒業生の方々には、この設備がないため中電江津発電所とか山バルの発電所への見学で発電所の設備を学習したものであります。実った実習としては、四九年度の三年生から、二泊三日の日程で松江市に設立された島根県立情報処理教育センターへ出掛けるということでもあります。このような教育実習の対象は、島根県下の工業科(電気・機械)と商業科であります。生徒諸君は大変喜んでおります。

今後の電気科の課題は、整備された沢山の実習設備を眠らすことなく学習や実習へと十二分に活かし、江工の名に恥じない立派な電気技術者の育成に努力せねばと思っております。

- 最後に、この十年間に転出された先生方の転出日と転出先は
- 奥 信義 四九年四月 出雲工業 本校在職十一年間中九年間科長として本校電気科や学校の発展のため多大な貢献がありました。
 - 伊 浜一男 四四年四月 県立情報処理教育センター(指導主事) 自動制御実習室の建設や校内電気施設・設備で尽力がありました。
 - 中 島 茂 四八年四月 松江工業 電子工学の面で尽力がありました。

江工会 西から東から



江津市役所支部の近況

木材工業科六期生 佐々木 公
(江津市三宮町)

母校開校四十周年おめでとう。人生に例えればまさに働き盛り、いよいよ充実した壮年の域に達しました。卒業生も六十余名を擁する大きな成長ぶりです。母校の今日あるは、初代鎌田校長の開校精神が歴代校長に受け継がれ、又地域の方々のためみない協力があつたればこそです。

当支部の生い立ちは昭和二十三年会員二十三名、笠井謙支部長のもとに発足しましたが、皇曆十六年、会員五十三名の大世帯となり、市行政のあらゆる分野で活躍しております。建設部門十六名、農林部門十名、水道局八名、消防署七名、その他十二名。卒業年次では昭和十三年(二期生)から昭和四十七年までの三十五年間にまたがっており、親子の会員も一組できました。専修科目も建築、化学、電気、機械、今はなくなっている木材工業、窯業、金属工業と多彩です。

本年一月本部監査をしておられた佐々木保(建築七期)さんが急病で亡くなられました。今でも元気であった当時の温顔が目前に浮んできます。会員一同謹んで故人のご冥福をお祈りしています。

恒例の会員親睦行事としては、去る三月、世紀の大工事関門大橋の見学と下関観光を行い家族を含め多数参加があり、一層の親睦を深めました。通学路にある老松に見守られながら大きく前進を続ける母校、その母校の見える丘にある江津市役所支部の近況をお知らせしました。



時代回顧

建築科六期生 八田 文男
(山陽国策パルプ支部長)

「産業戦士」という言葉があつた時代である。技術を身につけようとする少年達が、いわゆる実業学校へ殺到した時代であった。今と違って大学出の技術者など、ほんの教えるほどしかいなかった時代で、工業学校を出て数年すれば立派に一人前の技術者として、社会的に認められた時代である。大学も少なかったが、中等学校(今の高校)もまた少なく、この付近では、江工、浜中、少し離れて、大中、山本農林といった状況であった。近在の小学校を卒業して進学した者たちは大体、江工、浜中、に集中していたようである。当然のこととして同じ小学校を卒業した仲間が沢山いた。私達の時期は丁度学制改革の時期に当り、本科、第二本科、新制度の本科といったように複雑なコースのそれぞれに同級生がいた。戦争が終つて江津へ帰つてみると、新制の本科にいたAは沖縄で戦死したとか、第二本科のIも戦死したらしいとか、本科にいたBは特攻隊で出撃寸前に終戦になったとか、乏しい者で「どぶくろ」を飲みながら、誰彼の身の上に思いを馳せたものであつた。

そして社会情勢がまだ落ち着いたうちから、彼等は続々と故郷を後にした。しかし私達のように、そのまゝ、居残つたものもいくらかはいる。

江津の風景も最近、目に見えて変わつてきた。通学路のあの懐かしい松並木は「五左衛門並木」と呼ばれ、昔に変わらぬ面影を保っているが、駅前付近にはビルが建ちならび、江川はコンクリートで固められ、ゴルフ場の話もちとほら、まさに時代は流れているのである。

開校40周年

記念誌

青根島立江津工業高等学校
江津工業高等学校

5
11/16/98

昭和九年
(1934)

歴代生徒会役員一覽

年 度 役 職	委 員 長	副 委 員 長	副 委 員 長	年 度 役 職	委 員 長	副 委 員 長	副 委 員 長
昭和24年(前)	河野孝志			昭和25年(後)	三町勝正	大賀敬二	
25年(前)	佐貫秀信			※26年(前)			
	河野孝志						

年 度 役 職	会 長	副 会 長	副 会 長	年 度 役 職	会 長	副 会 長	副 会 長
昭和26年(後)	三宅勉	林久直		昭和31年(後)	大谷安弘	森井憲司	
27年(前)	高田泰			32年(前)	高場勇	佐古正吉	
(後)	林久直	森脇祐三	植田勝三	(後)	佐古正吉	松浦昭三	田辺剛二
28年(前)	野原功汎	野上正廉	山根久朗	33年(前)	田辺剛二	酢谷端正	竹内征男
(後)	植田勝三			(後)	林和憲男	千代延末満	高場勇
29年(前)				(後)	半矢惠彬	寿和憲	伊田勝彦
(後)	橘目茂	香田晃	中村一	34年(前)	半矢惠彬	橘本浩	伊田勝彦
30年(前)	森井憲司			(後)	寿和彦	伊田勝彦	渡辺勲
(後)	橘本健			(後)	橋本浩	渡辺勲	若三隆行
31年(前)	原田光政	嘉戸省一郎	漆谷源三	※36年	森山狂夫	岡本守山	崎一雄

年 度 役 職	会 長	副 会 長	副 会 長	総務部長	生活部長	文化部長	体育部長
昭和37年	原田祐司	奥井礼馨	渡辺勲	二浦孝夫	大屋鉾夫	綿貫敏孝	藤野忠義
38年	尾崎昇二	山本哲也	浜浦武志	沢津藏	吉原毅	品川進	新川栄一
39年	井上博雄	大坂英晃	和田幸智	二浦博	臼井正憲	潮健二	高崎惠
40年	堀江芳則	吉村誠三	浦利幸	新屋俊晴	佐々木芳樹	川原健次	田村隆博
41年	大和一昭	吉川武夫	森重善	石本幹夫	岡本和真	今田康博	高橋和憲

42年	下野悟志	佐々木省三	佐々木敏和	川本聖司	小林祥夫	田畑喜幸	玄羽康司
43年	森野茂	天野孝人	橋本志郎	幡敏幸	松谷豊	夏山明男	中里得郎
※44年	堂原幾雄	東誠	住田設治	岩本敬昭	近重巧	森田修	下野幹生

年 度 役 職	会 長	副 会 長	副 会 長	書 記	書 記	会 計	会 計
昭和45年	植田哲夫	大畑和憲	諸岡一夫	正司国重	坪本瞳	渡和史	近重裕美子
46年	諸岡一夫	竹内教之	市原弘明	青木幸夫	清水悦子	松岡賢治	的場永京
47年	渡穂稔	市原弘明	佐々木勝	横峠公夫	池本邦子	金子原康次	福井玖美子
48年	松原和志	仲井薫	村上章	田尻剛司	森口山子	岩本和美	萩原静子
49年	石川弘幸	伊藤岩雄	松永和博	志垣真由美	鎌田正志	岡崎誠次	中村美智子

年 度 役 職	生活委員長	体育委員長	文化委員長	保健委員長	交通委員長	図書委員長
昭和46年	清原稔	岡本正友	田中昇	菅森満範	村上和男	上野一博
47年	田中寿人	高野正則	今西正一	佐田野了	森脇秀徳	横出慎也
48年	岩本秀行	浅田和夫	三浦茂紀	松原章彦	山生公成	佐々木幹生
49年	小川秀男	岡村隆好	郷田恵司	中村靖	沖出敬	福森謙孝

※規約改正
空欄は未詳

校務の今昔

総務部

教務部

総務部の本校における歴史は僅かに二年有半、したがって細についたばかりです。これまでは総務の仕事も教務部でいつさい仕切っていました。そのため教務部は本流である学習に関する活動が儀式、行事、会議 P T A 等々に追いまわられ、阻害され、あれやこれやで特に部長は神経をすり減らす破目に陥入っていました。それで教務本来の活動を積極化するために総務部新設論が早くから台頭していました。また一方において承らく固定化していた分掌刷新の企図もあったと思います。藤田部長、小村前教頭特に小村前教頭が強い主張者であり推進役でした。

昭和四十七年度の分掌決定に当たって辻余曲折はありましたが総務委員会でこの役を背負われました。

初代総務部長としての最初の苦心はスローガンの作成でした。これを広告しておくも華々しく開店したように見えるという確信からです。

「学校運営の円滑を図るため全校の油滑剤としての役割を果たす」、先づ奉仕の精神を強調し、下働きを買って出たわけです。入学、卒業式、会議等の資料作成、設営から湯茶の接待煙草の炊きまで気を効かす仕儀になりました。「広く問題提起を促し、会議内容の充実を図る」問題提起は創造活動の出発点と観じ又広く会議を興し万機公論に決すべしとの明治憲法にもあやかつて掲げたものです。会議が度重って仕事ができぬという不平の声が聞えるようになり理想と現実の齟齬がでるこの頃です。「P T A 活動の充実を図る」学校と保護者との間に強力なパイプをつなぎ絶えず緊密な連絡を保つておくことも対象が大きいので大変な仕事量です。

昭和四十八年度改定の高教教育教科課程を紹介いたします。本改定の主な内容を簡単に説明しますと、先ず実験実習を重視し履修時間を増したこと、修得でなく履修制をとっていること。特に専門科目について大単位制をとったこと等が挙げられます。これは学力や能力が産業高校では低下し多様化したことや時代の要求に対応した処置と思われれます。即ち内容的に精選集約して取り組み易くし且一般化しており、理論的専門的に深く掘り下げるより基本的なものを押え、そこから発展した幅広い知識や技能を与えて応用力を養うことにポイントを置いています。また本改定では従来の特別教育活動を廃止して全生徒必修の教科以外の教育活動を取り入れたことです。学校行事や生徒会活動を義務づけています。さて、このような教科課程での生徒諸君の学習効果の方はどうでしょう。歴史と伝統をふまえる教師生徒が協力し着々とその効果をたかめています。

教科	単位数	単位数
国語	7	7
現代国語	2	2
古典	2	2
倫理	2	2
政治経済	2	2
社会	3	3
世界史	3	3
地理	3	3
数学	6	6
数学I	3	3
数学II	3	3
物理	3	3
化学	3	3
生物	3	3
保健	2	2
体育	7	7
音楽	2	2
美術	2	2
家庭	2	2
英語	8	8
英語A	4	4
英語B	4	4
英語C	2	2
英語D	2	2
英語E	2	2
英語F	2	2
英語G	2	2
英語H	2	2
英語I	2	2
英語J	2	2
英語K	2	2
英語L	2	2
英語M	2	2
英語N	2	2
英語O	2	2
英語P	2	2
英語Q	2	2
英語R	2	2
英語S	2	2
英語T	2	2
英語U	2	2
英語V	2	2
英語W	2	2
英語X	2	2
英語Y	2	2
英語Z	2	2
英語AA	2	2
英語AB	2	2
英語AC	2	2
英語AD	2	2
英語AE	2	2
英語AF	2	2
英語AG	2	2
英語AH	2	2
英語AI	2	2
英語AJ	2	2
英語AK	2	2
英語AL	2	2
英語AM	2	2
英語AN	2	2
英語AO	2	2
英語AP	2	2
英語AQ	2	2
英語AR	2	2
英語AS	2	2
英語AT	2	2
英語AU	2	2
英語AV	2	2
英語AW	2	2
英語AX	2	2
英語AY	2	2
英語AZ	2	2
英語BA	2	2
英語BB	2	2
英語BC	2	2
英語BD	2	2
英語BE	2	2
英語BF	2	2
英語BG	2	2
英語BH	2	2
英語BI	2	2
英語BJ	2	2
英語BK	2	2
英語BL	2	2
英語BM	2	2
英語BN	2	2
英語BO	2	2
英語BP	2	2
英語BQ	2	2
英語BR	2	2
英語BS	2	2
英語BT	2	2
英語BU	2	2
英語BV	2	2
英語BW	2	2
英語BX	2	2
英語BY	2	2
英語BZ	2	2
英語CA	2	2
英語CB	2	2
英語CC	2	2
英語CD	2	2
英語CE	2	2
英語CF	2	2
英語CG	2	2
英語CH	2	2
英語CI	2	2
英語CJ	2	2
英語CK	2	2
英語CL	2	2
英語CM	2	2
英語CN	2	2
英語CO	2	2
英語CP	2	2
英語CQ	2	2
英語CR	2	2
英語CS	2	2
英語CT	2	2
英語CU	2	2
英語CV	2	2
英語CW	2	2
英語CX	2	2
英語CY	2	2
英語CZ	2	2
英語DA	2	2
英語DB	2	2
英語DC	2	2
英語DD	2	2
英語DE	2	2
英語DF	2	2
英語DG	2	2
英語DH	2	2
英語DI	2	2
英語DJ	2	2
英語DK	2	2
英語DL	2	2
英語DM	2	2
英語DN	2	2
英語DO	2	2
英語DP	2	2
英語DQ	2	2
英語DR	2	2
英語DS	2	2
英語DT	2	2
英語DU	2	2
英語DV	2	2
英語DW	2	2
英語DX	2	2
英語DY	2	2
英語DZ	2	2
英語EA	2	2
英語EB	2	2
英語EC	2	2
英語ED	2	2
英語EE	2	2
英語EF	2	2
英語EG	2	2
英語EH	2	2
英語EI	2	2
英語EJ	2	2
英語EK	2	2
英語EL	2	2
英語EM	2	2
英語EN	2	2
英語EO	2	2
英語EP	2	2
英語EQ	2	2
英語ER	2	2
英語ES	2	2
英語ET	2	2
英語EU	2	2
英語EV	2	2
英語EW	2	2
英語EX	2	2
英語EY	2	2
英語EZ	2	2
英語FA	2	2
英語FB	2	2
英語FC	2	2
英語FD	2	2
英語FE	2	2
英語FF	2	2
英語FG	2	2
英語FH	2	2
英語FI	2	2
英語FJ	2	2
英語FK	2	2
英語FL	2	2
英語FM	2	2
英語FN	2	2
英語FO	2	2
英語FP	2	2
英語FQ	2	2
英語FR	2	2
英語FS	2	2
英語FT	2	2
英語FU	2	2
英語FV	2	2
英語FW	2	2
英語FX	2	2
英語FY	2	2
英語FZ	2	2
英語GA	2	2
英語GB	2	2
英語GC	2	2
英語GD	2	2
英語GE	2	2
英語GF	2	2
英語GG	2	2
英語GH	2	2
英語GI	2	2
英語GJ	2	2
英語GK	2	2
英語GL	2	2
英語GM	2	2
英語GN	2	2
英語GO	2	2
英語GP	2	2
英語GQ	2	2
英語GR	2	2
英語GS	2	2
英語GT	2	2
英語GU	2	2
英語GV	2	2
英語GW	2	2
英語GX	2	2
英語GY	2	2
英語GZ	2	2
英語HA	2	2
英語HB	2	2
英語HC	2	2
英語HD	2	2
英語HE	2	2
英語HF	2	2
英語HG	2	2
英語HH	2	2
英語HI	2	2
英語HJ	2	2
英語HK	2	2
英語HL	2	2
英語HM	2	2
英語HN	2	2
英語HO	2	2
英語HP	2	2
英語HQ	2	2
英語HR	2	2
英語HS	2	2
英語HT	2	2
英語HU	2	2
英語HV	2	2
英語HW	2	2
英語HX	2	2
英語HY	2	2
英語HZ	2	2
英語IA	2	2
英語IB	2	2
英語IC	2	2
英語ID	2	2
英語IE	2	2
英語IF	2	2
英語IG	2	2
英語IH	2	2
英語II	2	2
英語IJ	2	2
英語IK	2	2
英語IL	2	2
英語IM	2	2
英語IN	2	2
英語IO	2	2
英語IP	2	2
英語IQ	2	2
英語IR	2	2
英語IS	2	2
英語IT	2	2
英語IU	2	2
英語IV	2	2
英語IW	2	2
英語IX	2	2
英語IY	2	2
英語IZ	2	2
英語JA	2	2
英語JB	2	2
英語JC	2	2
英語JD	2	2
英語JE	2	2
英語JF	2	2
英語JG	2	2
英語JH	2	2
英語JI	2	2
英語JJ	2	2
英語JK	2	2
英語JL	2	2
英語JM	2	2
英語JN	2	2
英語JO	2	2
英語JP	2	2
英語JQ	2	2
英語JR	2	2
英語JS	2	2
英語JT	2	2
英語JU	2	2
英語JV	2	2
英語JW	2	2
英語JX	2	2
英語JY	2	2
英語JZ	2	2
英語KA	2	2
英語KB	2	2
英語KC	2	2
英語KD	2	2
英語KE	2	2
英語KF	2	2
英語KG	2	2
英語KH	2	2
英語KI	2	2
英語KJ	2	2
英語KK	2	2
英語KL	2	2
英語KM	2	2
英語KN	2	2
英語KO	2	2
英語KP	2	2
英語KQ	2	2
英語KR	2	2
英語KS	2	2
英語KT	2	2
英語KU	2	2
英語KV	2	2
英語KW	2	2
英語KX	2	2
英語KY	2	2
英語KZ	2	2
英語LA	2	2
英語LB	2	2
英語LC	2	2
英語LD	2	2
英語LE	2	2
英語LF	2	2
英語LG	2	2
英語LH	2	2
英語LI	2	2
英語LJ	2	2
英語LK	2	2
英語LL	2	2
英語LM	2	2
英語LN	2	2
英語LO	2	2
英語LP	2	2
英語LQ	2	2
英語LR	2	2
英語LS	2	2
英語LT	2	2
英語LU	2	2
英語LV	2	2
英語LW	2	2
英語LX	2	2
英語LY	2	2
英語LZ	2	2
英語MA	2	2
英語MB	2	2
英語MC	2	2
英語MD	2	2
英語ME	2	2
英語MF	2	2
英語MG	2	2
英語MH	2	2
英語MI	2	2
英語MJ	2	2
英語MK	2	2
英語ML	2	2
英語MN	2	2
英語MO	2	2
英語MP	2	2
英語MQ	2	2
英語MR	2	2
英語MS	2	2
英語MT	2	2
英語MU	2	2
英語MV	2	2
英語MW	2	2
英語MX	2	2
英語MY	2	2
英語MZ	2	2
英語NA	2	2
英語NB	2	2
英語NC	2	2
英語ND	2	2
英語NE	2	2
英語NF	2	2
英語NG	2	2
英語NH	2	2
英語NI	2	

学校は多数の生徒の集団生活の場であり教育活動の全体を通して安全確保の指導とその管理の強化に努め、災害発生への減少に努力しています。が、学校管理下で発生した事故の統計的事態を通して安全教育の一端を理解していただきたいと思ひます。本校の災害発生件数は昭和四十四五年と全国、県平均を上回り県一位をしめ四十七年度は第四位と段々減少の過程を取っています。また一件平均給付額は、県下45校中、第20位をしめ、小さい災害が多く発生していることをあらわします。次に学校教育のどんな場面で災害が発生しているかを述べてみますと、全国、県の傾向と同じく特活が約半数をしめてその中でも80-90%が運動クラブの事故です。次に授業(主として体育)中の災害です。災害発生状況は、男女間の軟着、傷害部位の相違、運動的・活動的・静態的学習等の発生要因が入り混じっていますので学校としては、それ等原因の究明により災害防止をしています。方法としては、

- 1、安全教育(各教科、道徳、特活)
- 2、安全管理

- 心身の管理……性格、知能テスト、体力測定、傷害の記録、健康手帳の利用
- 生活の管理……教科、休憩、クラブ、行事等の事故防止のための職員の間通理解と指導
- 環境の管理……物、場所における施設設備の点検、保健委員の安全点検と消毒

を実施していますが私達が安全であるためには、私達自身が安全にとって望ましい行動を実践することであります。

本年度は新学習指導要領の改定の二年目であるので、原則ではあるが全学年保健二単位の二十時間、体育実技二単位の四十二時間(うち、格技として柔道を一年は二学期に、二年は三学期、三年は三学期に実施)計六十三時間を四名で担当しているが、これは普通科高校と比し実に四単位も少なく、この差を如何に縮めるかが我々の大きな課題である。

近年、県教委保体課の補助を受け、体力トレーニングの施設を設け、体力向上には行んでいる高校もあるが、これに要する経費、実施方法等に種々問題を含んでいるようであり、これを直ちに本校でもということとは問題であろう。従つて、本校では既設の施設をフルに活用すること、体育的行事を学校行事に位置づけることにより教職員と生徒との疎通を図り、正課体育を中心として、体育系必修クラブ、課外の部活動を通じ、体育の日常化及自主的健康管理の強化を図り、スポーツを愛好すると共に生涯にわたつて行える楽地を養い、資実剛健、不撓の氣風を身につけさせるべく微力ながら努力を重ねている次第である。

次に、その行事名を附記しておく。

- 四月 体力診断テスト ロードレース(男子十回、女子四回)
- 五月 運動能力テスト 遠足(日御碕・津和野・三瓶山)
- 六月 陸上競技大会(西グラウンドの完成を記念して)
- 七月 バレーボール大会(各クラス二チーム)相撲(団体、個人)
- 九月 運動会(西科対抗)
- 十月 ソフトボール大会(クラス対抗)
- 十一月 駅伝大会(七区間、二十六回、クラス対抗)
- 十二月 サッカー・バスケット・卓球・柔道の各大会(クラス対抗)

図書館

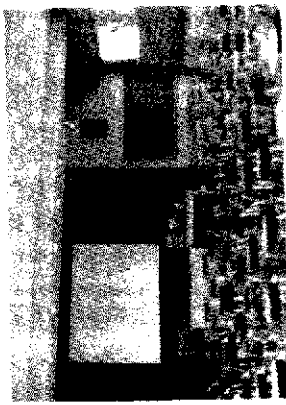
図書室として確立したのは昭和二十五年、当時の図書原簿をひもどくと同年十二月十日までの受入登録が千八百一冊、当時生徒数約六百一人、一人当り二冊弱の現有数であった。しかし、これらの蔵書は当時四科(建築、機械、木材工業、工芸、窯業)の各教務室に備えつけられていたものや当時の、現職教員、先輩、在校生など幅広い層からの寄贈図書であり図書室の確立については一方ならぬ努力が払われたようである。なお原簿、校費で購入された書籍は全体の約二割程度というわずかなものであった。図書室の位置は現在の昇陸口あたりで当時の面影は見えないが木造平屋の一教室の広さで狭苦しく、別に図書教室として今の家庭科の教室が当てられていて工業科関係の本が主として備えられていたようである。現在当時の書籍はほとんど「除籍」「亡失」として原簿に処理されてあつて教壇の辞典が現存しているにすぎない。

科学技術と文化の進展にともない、昭和四十一年三月下旬の竣工で翌年四月六日現在の図書室に移転現在の形態が整った。尚四十年十一月一日、当市松川町出身の沖島謙三氏が私財五百万円および蔵書七二五冊をあわせ寄贈された。この文庫には「高潔なる人格と知性、高度の技術を会得するためには読書に優る方法なし」という寄贈者の精神がこめられている。

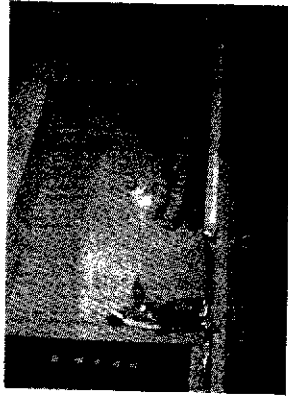
現在蔵書一五、六七七冊(五月一日現在)関係施設面積三四六平方(会議室を含む)一六八名の閲覧可能を広さを有し、一人当り一八、五冊という割合になっている。生まれたこれらの環境は先学者、諸先輩の芳に負うところ大であることを付してペンを置く次第である。

視聴覚

視聴覚室の竣工は昭和四一年三月使用開始は同年四月からでした。前年の四〇年当初、図書、製図、視聴覚室の新しい棟が建設されるというので各担当者が広島と岡山の先進校へ出かけその折見聞したアイディアを生かし建造されたのが今の視聴覚室で例えば天井の調光、ワイドスクリーン、メモ付椅子等々であります。そしてこの視聴覚室で八ミリ、一六ミリ映写、スライドの映写、ステレオ演義等それぞれホームルームや建築科の実習スライド、一年の音楽とよく利用され今日に至つています。次に昭和四四年ビデオテープレコーダーが購入されNHKの学校放送番組の録画が出来ようになりホームルームや各教科に利用されるようになりました。又「三沢投子」による春、夏の甲子園出場録画も学校の貴重な資料となつています。昭和四六年一六ミリ映写機が新調されました。この映写機は従来のタンクステン電球より電球も明るくセキソンの放電管が使用されていて鮮明な映画が見られるようになりました。又これと前後してオーバヘッドプロジェクターも年々充実され今では視聴覚室以外の特別室にも設置されるまでになりました。このように逐次視聴覚設備機械が充実されて来っていますが今後は現行以上にこれ等の組式的、計画的な運営利用を一層進めて行き視聴覚教育の真の目的を達成すべく努力しなければなりません。



従来、図書館と視聴覚を併わせて図書部として文化活動を担当してきたが、昭和四十六年に本校の文化活動を更に盛り上げようという声が高まり、図書部に文化係が新設された。それと共に、それまで生徒指導部に所属していた生徒会の文化委員会指導を図書部に移管し、翌年名称も議論自出の末に文化部と改称された。文化部担当の最大の行事は秋の文化祭である。文化祭の発端は終戦直後にさかのぼることができる。戦後間もなく木工工業科が復活したのを契機に運動会との併催で、木工科と機械科の実習作品の即売会が開かれた。物不足の当時のこととして、町中の評判となり大変な賑いを示したが、やがて木工科の廃止にともない下火となってしまった。次いで、昭和四十年に開校三十周年記念行事が各科、各教科の参加のもとに大々的に開催されたのを機会に、文化系部活動の発表の場として文化祭を毎年実施するよう決定され、翌四十一年に各部を中心に第一回文化祭として正式に発足することとなった。以来、文化祭はその規模を広げ、内容的にも漸次充実しつつある。試行錯誤を重ねながら、今日では講演会や文化系部活動の展示などの文化的要素と趣味屋や囲碁将棋などの娯楽的要素を加えた文化祭のパターンが定着してきている。しかし、残された大きな問題は生徒の文化祭にかける意気込みが運動会に比してまだまだ不足していることであるといえよう。



実業学校という大きな、そして複雑な組織の中に「学校事務」を扱う人達「事務屋さん」がいる。

事務は、学校の効果的運営に欠くことのできない部門でありながら、従来から

「事務は教育界の谷間」

「事務は縁の下の力持ち」

といった言葉で象徴されてきた、たしかに目立たない仕事である。事務の仕事は、それを行なうことによつて、一つ一つが片付いてしまう。将来に夢を託すといったようなことがない、そのせいかもしれない。

こうした立場にありながら、学校事務の内容は、日とともに繁雑の度を深めているのが現状で、僅かな人員で、効果的な運営を図ることは容易なことではない、ここにも事務屋さんの苦しみがある。

だが事務屋さん達は、自分の置かれている立場を十分に理解して、昨日も今日も、そして明日も、地道な道を歩き続ける、事務屋さんには、「回顧」はあつても「展望」がない。

ここまで書けば、事務屋さんにはみじめな姿になってしまう、理論と現実の相違は、事務室という事務屋さん達の城の中に見られる。

日々好日、小さな部屋の中に終日微笑があり、歌声がある。唇に歌をもち、心に太陽をもつ人達、江津工業高校の事務室は、明るく人達の集るところである。

部活動あれこれ

野 球 部

春の甲子園ベンチに入つてまず驚いたことは球場の広く感じる事。外野手の膝から下は全然見えない。打者に大声を出しても全く聞こえない。観衆の声援が空の方からベンチにかぶさってくる。こんな中で試合をするので選手も監督も自分を見失ってしまう。何んでもない失敗をする。良い試合をしなければ、さまざまなことはいけない、こればかりを考えながらいつのまにか試合が終つていた。失敗である。あがつていたのだ。試合よりも観衆を気にしていた。夏のベンチ、今度は雰囲気にもまれることなく思いきり試合することができた。唯今度は試合に熱中して冷静さを失うことがしばしばあった。得点のチャンスにサインを出すと選手が失敗する。アノ野郎、帰つて来たらゲンコツ入れてやろうと。又相手チームに得点を重ねられた時はどうしたら点を奪えないのですものか、と云うより試合の振り向きを見ただけになる。やはり団体競技は、指導者は冷静に選手を見守り、また選手は監督を信頼する。この関係が良い結果をもたらす。そのためには平素の練習からこの関係を維持することが大切である。これは昭和四十五年春夏連続甲子園出場の偉業を成し遂げた当時の室谷監督の反省の弁である。と同時に創立以来早や二十七年になる本校野球部への新しい贈りものでもあつたと思う。(写真は春の選抜大会のベンチ前で監督から注意を受けているところ。大会前の球場練習より)



バレーボール部

部誕生以来二十七年余、校内でも伝統ある部の一つと自負している。三十周年誌によれば四十年に一度優勝戦へ進出とあるが、それ以後、今ひとつの感があつたが、四十四年春の体育館球工を契機に四十五年春ベスト八、同五月常勝松工高を破り第二位、同六月の本校での県高校総体では準々決勝戦でまたもや松工高と対戦、第一セットを先取し先行するも頼みのエース柳原(四十六年卒・武田薬品光)が産廃をおこし、松工高の優勝を許して涙。また、四十六年総体では準々決勝戦で優勝候補筆頭の出産高を米田(四十七年卒・帝人三原)・市富のサウスボーコンヒで倒すもそこで屈切れて涙。しかし翌四十七年春には山下(四十八年卒・大阪三洋)を大砲後に、田辺・日野岡を機関砲役とし待望の中国大会出場を果たし、美禰工高、岡山東高と対戦し、ベスト八に入り気をよく、同六月の総体では船工の出産高と準々決勝戦で対戦、第一セットを軽く取り先行し昨年の再現かと思わせるも、そこが優勝経験のないチームの悲しき、今ひとつ最後のつめが甘く大海を選がす。その後、四十八、四十九年と若しくをいが、先の団体予選での欠々のベスト八を機に秋の新人戦では何とかベスト四に入るべく捲土重米を期して連日猛練習をしている昨今である。(写真は美禰工高の攻撃をブロックする面々)



弓道部

創設、昭和二八年秋九月、以来十二年間、青春の情熱を弓に打ち込み、静かな正しい射形と人格の陶冶、を旨として来たこの間、全国大会に五回、国民体育大会へ五回、中国大会連続九回出場の足跡を残す。

四〇年宮崎大会(河野宗道、三國九七、佐木恭、渡辺守)四二年菅野大会(藤地昭、森細正八、区田茂、佐藤義則、県予選に新記録樹立224中、奈良米三ヶ年、炎天風雪下の仮設道場で汗と涙と血のにじみ成果は早平く「江工に弓道部あり」の感を深くす。十月あこがれの道場建設完了。

四三年第二二回福井国体準優勝(中津二光)四四年千葉大会第五位、技能優秀第三位(中津二光、松山隆男、藤戸哲夫、県予選224中で記録更新)第二四回長崎国体第七位(中津二光、藤戸哲夫)四五年七月第十三回中国選手権大会優勝、個人二位、八月和歌山大会第十六位(佐々木好彦、今田隆、上田和秀、竹下好弘、井上土司、榊ヶ瀬孝(個人)、瀬尻裕人)十月第五回岩手国体(予選敗退渡辺博文、榊ヶ瀬孝)同十月弓道主催第八回中国五県弓道選手権松江大会優勝、技能最優秀(今田隆)四六年秋第二グランド達成のため思い出多き道場解体「惜別の情事に託す不能」の思い出のみ。第二六回和歌山国体第三位(永井誠)四七年春五月理道場移築完了七月第十五回中国大会第三位(市原弘明、酒井恵、岡山晴夫、丸尾達男、藤戸明之原守、細貝研作)四八年三重大会(予選敗退)も個人二位(藤戸明之)同七位(藤井充夫、大村孝二、三原孝義、原守、細貝研作、四九年第二九回茨城国体出場(米花肇、三原孝義、坂本勇)決定す。長年の二戸操に抱えるべくひたすら練習に余念のない現今である。元校長、山根善一先生書の「射者仁之道」の額、道場へ静かに掲げてあり、幾多の諸先輩、時の同朋に感謝して閉筆す。四九年十月記。

柔道部

昭和二十六年に創立された本校柔道部がもつとも躍進し活発になったのはこの十年間であらうと思われる。創立当所は本校には道場もなく現在の山陽国策ハルパの道場を借り、旧体育館、理道球場、旧体育館と道場も変遷し、現在は量も百参拾畳の多きになっており、果下に於ても柔道ではその名をとどろかせている。過去十年間の特筆すべき、活躍した選手名、戦績を追想してみよう。

四二年 総体で中量、軽量級において個人優勝(富金廣、森岡)

四二年 総体で団体優勝(横田、鬼城、中里、天野、下手)

四三年 中国予選で団体優勝(天野、中里、加藤、畑野、出合、佐々木)

四四年 総体で団体優勝(佐々木、横田、上手、平山、岩本、石田)中国予選優勝()

四五年 総体で団体優勝、中国予選優勝、新人戦団体優勝、総体重量級優勝(石田、渡辺、岡本、高井、森岡)

四六年 総体完全優勝(森岡、今野、藤井、池本、福富、益子原、立脇)

四七年 総体で重量級において個人優勝(立脇)

四八年 体重別大会で中量級団体優勝(堀越、山本、新田)

四九年 新人戦団体優勝(浜根、横田、清井、杉本、新田、透)

その他、数多くの諸先輩の伝統を守るべく、部員一同頑張っている。



(四六年度全国大会入場式)

水泳部

近年各学校の水泳施設は急速に改善されている中で、狭い校地のため専用プールさえ持たず山陽国策ハルパの御好意に甘えての借用プールでは選手諸君の努力にも拘らず、昔の先輩諸兄に頭の拳らぬ成績に終った感があることは残念に思います。四一年は自由形の堀口義典、四二年、四四年の二年間、女子背泳の佐藤正枝、四五年はバタの永井利幸、平泳の松本健一、四六年、四七年続いて平泳の川瀬俊彦、バタの林徳、自由形の花田充治、個人混泳の山本忠男、四八年は平泳の田中幸二、個人混泳の福井誠治、四九年は個人混泳と背泳に岩本誠治(福井改姓)の諸君が国体に出場活躍しました。その中で島根県記録を更新したのは、女子の佐藤の百背泳(一分二四秒八)、二百背泳(三分四秒二)、岩本の二百混泳(二分三一秒五)、四百混泳(五分二〇秒二)、千五百自由(一分九秒二秒三)、二百背泳(二分三一秒九)です。岩本は現在機械科二年生で今年は全国高校選手権大会に平泳の巨星前田君以来実に十二年ぶりに出場した選手で大いに来年に期待が持たれます。そのほか、一年生の藤井耕三は百背泳に(一分一七秒六)、二百背泳に(二分五三秒二)と前田新進先輩の指導のもと順調に伸びています。同じ一年生の大峰勝博は高校から水泳部に入った新人ながら自由形、個人混泳などにスケールの大きな泳ぎで県の第一人者となる日を目前にすばらしい進捗を示しています。(写真は島根県高校選手権)



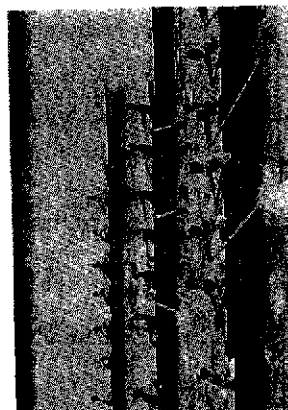
ボート部

開校四十周年を迎え、本校ボート部は、部新設から十六年目を迎えることになる。新設当初はフィックスだけであつたが、二十八年度よりナックルをも取り入れ同種目に活躍してきた。四十五年はフィックスを廃止して、ナックル一本にしぼり、女子クルーを加えた。更に四十八年度よりシングルスカルを取り入れ、現在はナックルフォアとシングルスカルの二種目に活躍している。なお今後はシエル艇への移行も考えている。

この十六年の間、毎年中国大会、全国大会、国民体育大会に出場して立派な成績をおつけてきた。中国大会では四十二年ナックル優勝を筆頭にナックル、フィックス共に二、三位の入賞は数回もあり、全国大会ではフィックスの三位入賞を始め、常に中位の實力を維持し、全国に江工の名高を掲げてきた。

なお、ボート部OBも江津ローイングクラブとして四十六年より毎年国体に出場し、準決勝に進出するなど好成績をおさめている。

これもひとえに部建設に努力された江工会の諸兄、これをそだてられた先輩諸兄のお陰であり、これらに報いるためにも、また島根漕艇界のためにも近代漕艇におくれを取ることなく、後世に継承する義務を痛感する次第である。(写真は四十五年度全国大会予選レース向う三ノ一が一位の江工クルー。準決、決勝に進出し三位入賞となる。)



バスケットボール部

昭和三十八年部が創設され最初の公式戦で隠岐高を一点差で破ってスタートした本校籃球部は、昭和四十一年頃興中学大会で活躍した舟中中のメンバーを中心に県下でも屈指の強力チームが出来、昭和四十四・五五年には県地区決勝大会二位、県総体八位、石見地区では常に一、二位と好調であった。この間顧問をされた吉田、林木両先生はレベルの低い石見部において、歴史の浅い本校籃球部を熱心に指導された。



その後、やや低調で、石見地区大会でも上位進出ができず、部員も一時は八名程度だったが、昨年、今年と優秀な新入部員が顔張り、県選手権二位、総体、国体予選ではシード校に選ばれるなど着々と実力をつけて来ている。

現在、部員は、十数名で昨年の主力がそっくり残っており、来年は四位以内入賞を目指し、身長の高さをスタミナとスピードでカバーすべく必死でオールコート走りぬく練習を重ねている。今後、県大会で少なくともベスト8に入り、チャンスがあれば優勝をねらうというような安定した実力をつけ、りつぱな伝統をつくってきたい。又、近いうちにOB会も結成して充実をはかりたい。

高校生活で仲間とバスケットボールに懸命に打ちこむことが、社会人となったいつか将来、必ず役立つことを信じて、細川主将を先頭に今日も練習に燃えている。(写真は現在の部員の練習風景)

軟式庭球部

部創設は昭和二十一年。以来数多くの試合で好成績をおさめている。とりわけ昭和三十七年ごろより四十二年ごろまでの活躍ぶりは、県下に江上ありの名手を高め、各種大会において、優勝または上位入賞の栄を勝ちとり中国大会、全国大会に出場しよく闘った。長い間学校にコートがなく不自由をして来たが、ようやく一面だけ新設してもらいました。が、時を同じくして庭球女子部が発足し女子コートとして使用している。男子は和家ら宇山陽国策パルプのコートを使用させて頂いている。一日も早く学校にコートを増設してもらい、のびのびと練習できる日が待ち遠しい。



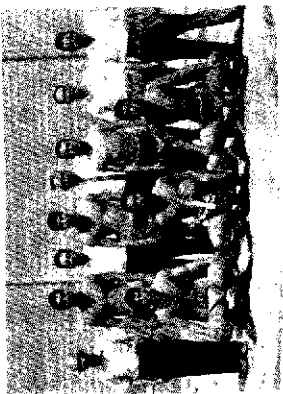
男子は近年出雲部の学校が優勢の中にあつて、本校もその活躍がやや、低調である。しかし本年新チーム編成後選手層も厚く、真夏の猛練習が乗り個々の実力が向上している。今秋の新人戦において西部大会優勝、県大会においても十年振りに団体優勝するなど来年度全国大会への出場が大いに期待される。さらに今後の練習により一層の飛躍を望みたい。

女子部も数少ない部員で未経験者というハンディキャップを乗り越え活動している。ことに昨年は中国大会に出場するまでに成長し、今後の活動の大きな動みとなった。さらに活躍を期待したい。(写真は十年ぶり一回目の団体戦優勝のメンバー)

相撲部

伝統ある相撲部の顧問を引き継いで十年、安田、金川、益子原良友、三人の先生方の築かれた、相撲道を守り、ここに十年間の記録をまとめてみると、充実した年とそうでない年とに別れる。

全国総合体育大会団体出場四回(四十二年、四十二年、四十四年、四十六年)、個人出場四回(四十年、四十四年、四十五年、四十七年)、団体出場では、三年連続の島根県記録をつくる。



都道府県選手権保持者、全国東西対抗大会にも四回出場し、四十四年榎山山本君が技能敢闘賞を受ける。四十六年には機械科藤山君が西軍選手として団体優勝をし、江津工業高校の名手を上げる。国民体育大会には、一回出場、四十二年埼玉国体には、工業化学本郷君出場。四十四年長崎国体には、建築科島田君が、全国選抜学生大会には、中国代表として、四十一年、四十三年と二回出場し優秀十六校に残る、全国新人高知大会に、四十八年、四十九年と二回出場、今年も全国新人高知大会に出場でき、ついで機械科津本君、電気科浜根、桜井両君が島根県代表として、国体中国予選大会に出場した。以上三十年の選手の活躍を記録してみました。総合体育大会、県予選に団体優勝が出来なかった年は、実力の差というよりは、ここの一番の試合に悔しきれなかったことのうちを反省している。(写真は第一回全国総合体育大会団体出場のメンバー) 鹿見島(足)大屋(吉本、大和、森本、嶋(弟))

体操部

本校の体操部の創設についてははっきりしないが昭和三五年頃生徒の手によって創設され今年で一五年目を迎えている。その間種々の県大会や運動会の美演に活躍して来た。昭和三十七年度初めて団体で出場し県大会で第三位。又昭和四〇年にも県大会で第三位になりこの時は中国大会へ初出場をしている。更に松浦君は県高校体操部の第一人者になり初の全国大会団体出場の名

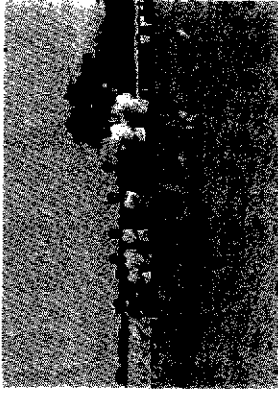


譽を勝ち得ている。又昭和四四年には角野君、小中君等がよく努力して県大会で優秀な成績を納めている。又大阪の体育大を卒業され今は江津中学校の講師をされている織口先生もかつては本校の体操部に在籍され当時大いに活躍されている。このように体操部は優秀な先輩に受けつがれ今日に至っている。現在は部員四名で専門の指導者もなく、練習場も他部と共同の狭い所で充分とはいえない器具を使って唯黙々と練習に励んでいる。しかし部員の一人(く)は常に熱心でフアイトもあり先輩の努力により創られた輝かしい成果と伝統をより一層発展させるべく頑張っている。近年は特に目立った成績は見られないが必ずや近い日には先輩に取れない成績が出るものと期待している。

(写真は初輪の練習風景で十字懸垂)

陸上 部

陸上部の創設は昭和十八年頃よりだ。過去三十年余の先輩諸氏の活躍を簡単に述べると、昭和二十六年、七年に三井庄道が百、二百米に記録を残している。そしてその当時八百米でも山崎卓夫が記録を残している。その後、江工の存在を広く轟かせた時もあったが、昭和四十二年に永原利久が二百米でがんばった。一方、昭和二十五年から高校駅伝にも出場するようになり、



毎年入賞する長距離選手を数多く生んだ。又、生れつきの不自由な身体で全国大会出場を果たした先輩も出た。

現在部員数は三十名で、近年出来上った西グラウンドを中心にして練習を行っている。しかし、昔と違ってグラウンドには恵まれてはいない。他のクラブと併用しているので、他のクラブ員と体当りしながらの練習となる。しかし、チームワークよく地味な練習をしていて、短距離、中距離、長距離、跳躍、それに投てきの各部門別に練習計画を製作してそれを実行している。生徒会から年四回の公式試合を許可され、総合体育大会、全山陸陸上競技会、新人陸上競技会、県高校駅伝に毎年出場する他に、個人的に石見陸上競技会等にも出場して実力を養っている。

昭和二十八年の第一回県総体以来本年度で第十二回を終えたが、総体から中国大会へ、さらに全国大会への出場を目標とし、さらに団体の出場を目標として毎日を励んでいる。(写真は西グラウンドでの練習中である)

剣道 部

剣道は、日本の伝統的なスポーツであり、いまや世界の剣道になりつつある。剣道技術は体力、氣力、心力の真づけによって完全になる。相手に技術を施す場合は、一つの技が攻防の二つの働きをなすことをもって最高の技術としている。現代剣道も他のスポーツと同様に競技であるから、勝つことも目標の一つであるが、本校の現状から将来技術が向上していく素地を作るよ



うな剣道を目標にしている。そのために、技術の修得を願ひ、師弟同行をひねとし、部活動をおして、好ましい人間関係を育てるよう努力している。過去の成績は、高体連関係大会団体ベストエイトになった事もあり、個人戦に於ては上位(県総体、中国大会県予選で男子十六位内女子秋季大会一位、二位)入賞、中国大会第十五回大会より毎年一、二名参加している。四十九年県総体、国体県予選では優勝校と互角に善戦した。九月十五日第八回島根県西部大会に於て二位となった。一、二年生に有望な選手がいるが、残念な事に、これら生徒は下宿生寮生、または山間へき地からの通学生であり毎日の練習時間が不足し、長期休業(春夏冬)中の練習等々問題が山積して十分な成長をあげる事が出来ない現状である。そのため平素の練習の合理化と共に、休み中の練習に替わる体力作りを計画的に行ない、問題点を乗り越えるべく、一歩一歩前進していきたい。(写真は現在の練習風景)

卓球 部

江津工業学校が新制高校になった昭和四四年に卓球部が誕生した。その年青木種雄主将が代表で初代主任顧問杉井二郎先生に、「ユニフォームを作ってもらえれば必ず三年までに県大会に優勝します」という誠にいじらしい願いを申し出、それをかなえてもらった部員は、一致団結練習に励み、二六年の県インターハイに寺本、高杉、田中、堀越のメンバーで県団体優勝を

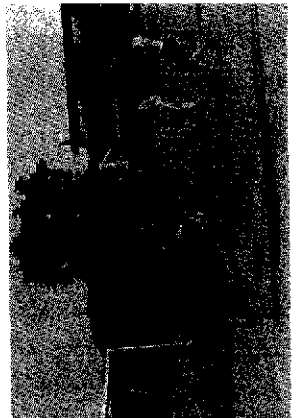


果たし、名古屋市の全国大会に初出場してユニフォームの恩に報いた。(寺本氏の語) 翌二七年には西谷進雄、二八年には笹本昌雄が全国大会に個人出場をした。その後は毎年のように中国大会には出場するが、全国大会には今一歩で出場できなかった。だが四五年高岡雅昭が県新人戦でシングルス第二位、翌四六年には県インターハイで待望の優勝をし、徳島市の全国大会に出場した。そして四九年中国大会予選で団体戦三位に入賞、岡山大会に出場し、県インターハイでも奮闘したが惜敗、三位に止った。又卓球部の伝統として昭和十九年から二十年間、毎年夏休みには宿舎し、それに卒業生の何人かが、欠かさず帰省して短い休暇の全部を当て、後輩と寝食を共にして指導に当たってくれていることである。その結果か大阪方面では数代の先輩後輩が卓球同窓会を作って親睦を計っており、地元では江津卓連の中心メンバーとして各種大会を運営し後輩を指導されている。(写真は四六年度中国大会学校対抗真岡山工戦)

サッカー 部

「さあいこうぞ。松林の木の間から夕陽を告げつばいに浴びて、イレブンのは走るノ蹶るノ、」

長い道程だった……思い起こせば昭和四十二年、それまでの願望が一気に爆発した生徒総会。当時の山根校長は生徒の熱意に動かされて、新グラウンド完成時におけるサッカー部の設立を約束された。その意志は代々の生徒に受け継がれ、昭和四十七年の新グラウンド完成とともに大きな力となっていた。



翌四十八年、「サッカー同好会」設立。だが、他生徒からの誤解という思いがけぬ障壁が待ち受けていたのだ。会員は思い悩んだ。三十数名が一名称、二名称……部会も何度も開いた。その時誰ともなく、「これは自分達の意志であるとともにまた先輩の意志なのだ。くじけてはならぬ、頑張ろう。」と。十月、江津高校との練習試合。一対二で惜敗。だが、どの顔も晴れやかだ。四十九年、いよいよサッカー部の誕生だ。部員数四十五名。練習にも一段と活気が漲る。五月、浜田商業高校との練習試合。二対二の引き分け。六月、総体。大きな希望を持って初の公式試合に臨んだ。だが、思いもかけぬ惨敗を喫した。対隣康水産高校〇対五。やはりどこかに容易な気持が宿っていたのだろうか。この日を真の出発の日として、部訓「和」にどこまでも忠実に日々邁進している。

(写真は練習風景)